



TITLE:

# 消費地理に関する二三の問題

AUTHOR(S):

西龜, 正夫

---

CITATION:

西龜, 正夫. 消費地理に関する二三の問題. 地球 1928, 10(3): 188-195

ISSUE DATE:

1928-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183491>

RIGHT:

## 消費地理に關する二三の問題

西 龜 正 夫

消費地理などはあまり聞きなれない言葉であ

るが、經濟地理學の一部門として消費といふ事

實の地理的研究もあつて然るべきではあるまいか。經濟地理學と云へば生産とか商業とか交通とかいふことのみの研究に限られてゐる様でもあるが、消費といふことは人間生活には必然的に伴ふ第一次性の現象であつて、消費せんがために生産もし交換もするのであるから、人文事實の中では決して輕視出來ない事柄であると思ふ。

併し私がこんな事を考へついたのはほんの昨今の事であり、殊に今は旅行中のことゝて手元に參考すべき一冊の書物もないから、消費地理學などいふものを系統立てゝ述べることは到底企て及ばぬ處、たゞ思ひつくまゝに二三の問題

を書いて見ようとするに過ぎない。

生産する場所と消費する場所との間にはどんな關係があるか。換言すれば生産と消費との分布關係はどうであらうか、それについて三つの場合を考へることが出来る。

一つは消費する凡てのものが殆ど悉くその地で生産されるといふ場合である。これは中央アジアの遊牧生活とか極北土人の漁獵生活、或は大洋の中の離れ島などに見られる。近來は交通が發達して、文明人が世界の凡ての部分に足を踏み入れる結果、そんな處にも多少の物々交換などが行はれて、小刀とか針とかマツチとか、或は穀物とか織物とか云ふ様なものまでそれ等の地方に入り込む様になつては居るが、元來彼

等の生活は文字通りの自給自足で、衣食住を始めとして凡ての生活資料を自ら生産しやうとして居る。

然るにこれと全く反對の事實は吾人自身の生活に見出される。即ち吾人の消費してゐるものはその大部分が他地方で生産されたものであり又その生産するものは自ら消費せんがためではなくして、殆ど悉く他人の消費に供する目的で生産しつゝあるのである。世界の文化地帯と云はれる地方は大抵この様式に屬して居る様である。この二つは互に相反する兩極端であるが、更に今一つその中間に位する地方を考へる必要があらう。例へば維新前後の頃の日本の様に、大體に於て農工商の分業は行はれながらも、尙大多數の住民はその生活資料中の大部分を自ら生産して居た。現在の支那や印度でもやはり同様である。もとより前二者との境界は明瞭でないが、こう云ふ地方も可成り澤山あることは認められる。

三つの地方を何と名づけたらよいか、今私に

は適當な言葉が考へ浮ばない。自給地帯、分業地帯、そしてその中間地帯又は半自給地帯とも云つて見よう。拙い云ひ方だけれども。

この三つの地帯が何故に出來たかを、その地理的分布の上から考察して見ると、自給地帯は寒帶地方とか沙漠や草原とか、或は絶海の孤島とか深山幽谷とか、何れにしても比較的生産物の少い地方である。温度の低い地方、雨の少い地方生産すべき地面の狭い地方等で、他地方のために餘分の生産を營む力が無いが、あつても住民にそれだけの努力心が起らず、又交通が不便で他地方との交易といふことに非常な困難を伴ふ地方である。

だからそう云ふ地帯の生活は頗る低度のみちめな生活である。已むを得ざる自給自足であつて、他地方の人のために生産することが出來ないが故に、他地方の生産物を自己の用に供することも出來ないのである。それ故にその生産物の種類は限られて居るし、加工變形の方法は發

達しないし、随つて又慾望も極めて消極的でたゞ肉體的に生き得さへすればよいと云ふ程度に止まり、文化の段階も極めて低いこと云ふ迄もない。

然るに分業地帯を見ると、そこは物産の豊富な地帯である。あらゆる人生の必需品が取り揃へられてゐる。併しその大部分は人工を加へた品であつて、その原料は他から取り寄せられてゐる場合が多く、天産物としては決して豊富とは云へない。それも人口の比較的稀薄な北米合衆國の如きにあつては食料品に不足が無いけれども、人口の稠密なヨーロッパ等では食料品が非常に缺乏してゐる。つまり食料と原料との大部分を他地方に仰ぎ、その代りとして各種の製品を他地方へ送り出すが、それには極度の分業と大量生産の組織とが試みられてゐるため、個人的又は一小區域内の自給生活は不可能である。合衆國の様に廣い國では國家としての自給自足は出来るけれど、個人的地方的には全く駄目である。況や食料の不足する歐洲諸國の如きは、

國家としても自給の出来得ないことを世界大戰に於て明瞭に示した。

この地帯の特質は一口に云へば文化の進んでゐるといふことである。天産物をそのまゝ消費するのでなくして種々に加工變形變質せしめることの發達した工業地帯である。その住民は頭腦が發達し能率が高く高等な慾望が發達して居る。それは氣候がよいこと、地形が低平で海に近いこと等から來る現象で、つまり文化の發達し易い土地、随つて又住みよい土地、高尙な生活の出来る土地である。それ故に人々が稠密となり、元來天産の豊富な地域であるにも拘はらず、他地方から取り寄せねばならなくなつて居るのである。だから分業地帯は即ち文化地帯であると云つてもよい。

然らば中間地帯はどんな部分か。これを實例について考へると先づ支那である。支那の本部殊に楊子江の流域の如きは地勢氣候等の上から云へば分業地帯であるべき筈である。それであるのに尙半自給の經濟狀態であるのは文化の進

歩が後れてゐるからであつて、その原因は主として人爲的のものであらうと思はれる。

次に印度を見る。そこには棉その他の輸出が多く、一面イギリスその他から製品の輸入も少くないけれども、住民の大部は尙自給生活を離れること遠くない。こゝは熱帯地方で天産は非常に豊富であるが、氣候の關係上住民は怠惰に流れ、精神的にも肉體的にも能率は頗る上らない。若し彼等のなすがまゝに任せて置けば自給生活の域を脱することは出来ない筈であるが、文明國民はその豊富な天産に目をつけ、それを自己の需要に供せんために熱帯民に對して強制生産を行はしめてゐるのである。そしてその代償として種々の製品を押し賣りするが、それ等に對する眞の自發的需要は容易に起らないから、文明國民の投資と管理とによつて引きづられて行くのみで、何時迄たつても文化の進歩は望めそうにない。

であるから中間地帯は概して天産の豊富な地域であるが、政治その他の人爲的原因か、若く

は氣候の原因によつて文化の進まない地方である云つてよい。そして兩者共に文化地帯からの投資の目的地となつて居るのが著しい現象である。

結局三つの地帯は天産の多少と文化の進否とに關係するものである。

消費の目的は何であるか。簡單に云へば生活せんがためであり、慾望を充たさんがためであるが、生活にも一次的二次的の區別があり、慾望にも低度のもものと高等のものである。その中で最も手近かなものは先づ食物であらう。食物は凡ての動物に共通して、生きて行くためには非無くてはならぬ第一材料である。次に衣服と住居とは何れが先であるかわからぬ。動物は衣服を有しないが棲家をもつて居るものは多い。人間にも全裸體のものはあるが住居の無いものは稀な様であるから、住居が先で衣服が後であるかも知れない。

次には諸種の道具といふものが作られるため

の消費が始まつた。道具を使ふといふことは二本の足で直立し二本の手を遊ばせることの出来る人類に於て始めて見る處である。道具の種類は色々であるが、食器と火を起す道具と武器とが最も初めから發達した。そして諸種の天産物を獲るための道具、これを運搬するための道具これに加工するための道具等が次々に發達したものである。

それと同時に醫療を目的とする消費も相當早くから發達したらしい。支那では神農氏が百草を嘗めた傳説がある。キナやコカは無智の土人によつて早くから用ひられて居た。

火は食物を調理するために早くから利用せられた。その當時は新たに火を起すことは非常の努力を要したので、一度得た火は永久に消さない様に注意したから、燃料は比較的不經濟に消費されたと云つてよい。その目的は主として熱を得るためであるが、夜はその光が野獸の襲來を防ぐことにもなるので、光としての利用も行はれないことはなかつた。

娛樂のための消費は恐らく二次的のものであらう。そしてそれは子供の玩具から出發したのでは無いかと思はれる。

かう種々の目的に消費が行はれて居るが、これを要するにその消費目的が單純であるか複雑であるかは主として文化の程度に正比例する。人類の頭腦が發達して工夫考案を凝すに至つて始めて複雑なる消費形式が生れる。それと同時に天然の物資が得易いか得難いかと云ふことも關係する様である。

文化が進むと、同じ目的に對する消費の方法や様式も次第に變化して行く様である。その著しい例は消費物が動植物から次第に礦物に轉じて行く事實である。

見よ木造の家屋は鐵筋コンクリートになり、藥屋根は瓦屋根になり、杉の電柱は鐵柱となり、船は多く鋼鐵船となり、汽車の客車も鋼鐵製が増加し、紙の障子はガラス張りに、毛筆は金ペンに、數へ立てれば際限もない。醫療に用ひる藥

品さへも草根木皮は礦物性のものに代らんとし、戦争も弓矢がすたれて鐵の戦ひとなつた。

燃料も薪炭已に缺乏を告げて石炭や石油の使用が次第に盛となり、交通機關も牛馬からガソリンへと變化して行く、たゞ今日に至つても尙動植物を主とするものは食物と衣服の材料のみである。

そこで一方から見ると一次的の生活に甘んずる文化の低い住民は主として動植物を消費し、文化が高まるに従つて鑛物の使用が大になるとも考へられる。併し鑛物の使用が文化人によつて始めて初められたのでは無い。原始の時代から石・土・青銅・鐵等の使用は已に開けて居たそれ等で作つた器具は今も昔の遺物として所々に發見されるのである。

動植物の産出は地形や氣候に制限されるけれども、人類の工夫によつてそこに何程かの修正が行はれる。故に暖地原産の小麥も寒地に栽培される様になり、樺太でさへも稻の栽培が試みられる様になつた。それは品種の改變であるが

若し同様の氣候狀態であるとかわけなく傳播が行はれると云ふことは甘蔗・棉・ゴム・キナ・煙草などの例でも肯かれる。然るに鑛物に至つては事情は大に違ふ。天然に存在しない所では人力で如何ともすることが出来ないし、一度採取すれば再び得ることは出来ぬものである。そこで鑛物の消費は交通の發達と密接な關係を生ずる。交通不便の處にある鑛物は容易に消費されないが、それは屹度交通の發達を促進してやがて採掘されるに至るものである。スバルバートの石炭やカタंगाの銅はこの間の消息を物語つて居る。

鑛物の消費は主として文化地帯に盛であるがその産出は極めて不規則で且つ偏してゐる。そのことが文明國間に於ける鑛物奪取戰となつてあらはれる。英米の石油戰も、支那に於ける利權爭ひも、ひいてはベルシヤやメキシコの政争もその一面のあらはれであらう。

併し鑛物の中でも石炭や石油の様な有機鑛物は、消費されると全く形質を變ずるものである

から、近い將來に全く地球上から姿を消す時代が来るであらう。其他の鑛物は生物と違つて消費と云つても永久に残る性質のものであるが、石炭と石油は全く仕方がない。そこで將來はこれが生物によつて代られることになるかも知れない。ガソリンの代りにアルコールが考へられてゐる様に。

これを要するに熱帶地方では植物の消費が最も盛で、椰子の木一本で衣食住の凡てを支辯するものもあるに反し、寒帶地方では動物を主として馴鹿や海豹が唯一の資源であるが、溫帶の文明國にあつては鑛物の使用が最も盛で、世界のあらゆる地方からこれを取り寄せて消費してゐるのである。

消費の方法や手段は土地によつて色々差異があるがこれも、概して文化段階の相違によるものであるらしい。野蠻未開の人民は概して天産物そのものをそのまま消費するが、文化の進んだ地方ではこれに種々の加工を施して變形・變

質・分解・合成した上で消費することが多い様である。

狩獵から牧畜がはじまり、採果から農業を工夫し、漁業が水産養殖業に發達するだけでも、人類の數百千年間に於ける經驗と思索の結果であつた。況や人絹・人造樟腦を工夫するまでには何程の努力が拂はれたことか知れない。

これは要するに一面人類の慾望が増加向上するからであり、一面には又人類の増加につれて自然物の產出が同じ割合には増加しないからでもある。土地は限られて居る。如何に工夫しても一定の土地から無限の生産は得られない。そこでこれに加工して少しでも價値を増加せしめ様とする。石炭をそのまま燃焼させるよりは瓦斯をとりコークスを製する方が石炭そのものの、能率をどれだけ増加させるかわからぬ。コールタールは塗料とするよりもこれから無數の藥品や染料を得ることによつて幾百千倍の價値を増加する。だから熱帶や寒帶には工業が盛でないが、溫帶の人口稠密な區域には工業が勃興して



ゐるのである。

人口が無限に増加するか否かはわからない。けれども土地は有限であり随つてその生産も有限と考へられるのに、人類慾望の増進は無限であるらしいから結局人力によつて價値の増加をやるより外仕方は無いであらう。而も價値の増加だつてそう無限に進むとも考へられないから何時かは行き詰るに違ひない。この行き詰りはどう解決したらよからうか。私は屹度そこに無盡藏なる物資が発見されるに違ひないと思ふ。否已にそのものは発見されて居るがその利用の方法がまだ不充分だから、そこに工夫と考案とが集中せられるだらうと思ふ。

それは何であるか。空氣と水と太陽熱と地熱

とである。これ等は嚴密な意味では無盡藏でないとも云へるが、先づ今日の智識から云へば無盡藏と云つてよからう。そして空氣から窒素を採集し、海水から食鹽を得、水力で電氣を起す等のことは已に實行せられて居る。將來は空氣中の酸素や、もつと上空の水素の利用、海水中にあるあらゆる金屬非金屬礦物の採集、海底に於ける水壓の利用、太陽の熱及び光線の直接利用地熱の利用等が着眼點ではあるまいか。

そうなつた時海に近い國、火山の多い國、太陽熱の強い熱帶の乾燥地等は、何等かの便宜を得るかも知れない様に思はれる。こんなことを研究するのは未來地理學かも知れない。(昭和三年七月旅中)